

教育実習（幼稚園）・保育実習の現状

—子ども理解を深める実習を目指して—

The Current Situation of Teaching Practice (Kindergarten) and Student Nursing Practicum
: Focus on Understanding Children

田甫 綾野、上田よう子、田澤 里喜

Ayano Tampo, Yoko Ueda, Satoki Tazawa

キーワード：教育実習、保育実習、幼児理解、実習日誌、指導計画、ドキュメンテーション

1. 実習の概要

本稿では、本学の幼稚園における教育実習及び、保育実習について、その概要と学生の学びについて報告する。

乳幼児発達学科では、ほとんどの学生が幼稚園教諭1種免許状と保育士資格の2つの免許資格の取得を目指しているが、周知の通り、この二つは制度上別のものとなるため、非常に多くの保育現場での実習が必要となっている。全体的な流れとしては3年次には、夏休みに保育実習Ⅰ（保育所）、秋学期に幼稚園実習Ⅰ、春休みに保育実習Ⅰ（児童福祉施設）と3回の実習があり、4年次には春学期に幼稚園実習Ⅱ、夏休みに保育実習ⅡまたはⅢを選択して履修している。なお、教育学科の学生で幼稚園での実習を希望する学生はこの中の幼稚園実習の部分のみを履修することとなる。

2. 教育実習（幼稚園）について

（1）教育実習事前指導

教育実習事前指導は3年生春学期に行っている。2023年度は3年生86名（教育学科9名、乳幼児発達学科77名）の学生が受講している。担当教員は、学部教員2名と、教師教育リサーチセンター教職サポートルームの客員教員2名とで、実習に関わる理論と具体的な保育につながる内容について、それぞれの教員の特性を生かした授業を展開している。内容は大きく分けて、幼児理解、指導計画の作成、日誌の書き方、模擬保育という流れとなっている。現場経験豊富な教員が多いため、実際の幼児の様子をビデオや写真を使って解説し、そこから日誌を作成したり、指導計画を立案したりするなど、実践に近い形での指導を行っている。

日誌の書き方については、従来よく行われていた1日の流れを追う「時系列」形式のもの、幼児の遊びの様子を理解し考察する「エピソード記述」形式のもの、また昨今の保育現場でよく使われている写真を使った記録である「ドキュメンテーション」形式のものと3つのパターンについて解説し、それぞれ学生が実際に記述する時間を設けている。保育現場は非常に多様であり、園によっても使用している記録の形式が異なっていることもあるが、自分の学びの視点やその日の保育の様子に合わせて学生自身が日誌の形式を自由に選んで記録できることも重要であると考えて指導を行なっている。

模擬保育では、全員の学生が、指導計画を立案し、実際に実践している。指導計画の立案の仕方や重要な

ポイントは講義でも指導しているが、実際に立案すると抜けてしまうこともあり、また模擬保育を行なってみると、指導計画立案の重要性が分かることも多々ある。準備の重要性や、発達、年齢、経験に合った遊びの提案の必要性など、実際に模擬保育を行うことで見えてくることも多く、また他の学生の模擬保育に幼児役として参加することで、学ぶことも多い。模擬保育実施後は、評価と反省を各自行い、具体的に自分の模擬保育を振り返ることを行なっている。

養成校の役割として、これからの保育のあり方や新しい記録の方法などを、幼稚園に発信するという意味もあると考え、積極的に新しい方法や考え方を学生を通して保育現場に伝えていきたいと考えている。その一つとしての「ドキュメンテーション」は、指導教諭と実習生とが子どもの遊びを共に考え、語り合うためのツールとして推奨してきたが、園側から評価していただくことが多く、実際に園の記録として取り入れてくださるようになったところもある。また、ドキュメンテーション日誌の作成に必要な写真を撮影する媒体としての iPod touch の貸し出しなども行い、ハード面でのハードルが高くならないようにもしている。

このように、事前指導では、一般的に教育実習で必要な内容や実習生としての心得等の指導といった内容だけではなく、学生自身が園の実情合わせて選択できるような内容を心がけ、学生が園での学びをいかに深められるかということを考えて行なっている。

(2) 教育実習 I

2023年度は自己開拓も含め、66園の幼稚園、認定こども園に受け入れをお願いしている。3年次秋学期の教育実習 I は2週間行われ、主に子どもと共に生活し、一緒に遊ぶことを通して、子どものことを実感として知ることを目的としている。学生はどうしても幼児に製作などを「どう教えるか」や、自分の考えたことを「いかに伝えるか」という、指導的な目線で保育を捉える傾向にある。そのため、実習では「先生の言葉かけで子どもがどう変わるかを学びたい」や、「子どものひきつけ方を学びたい」など、保育技術や保育者の指導方法等に目がいきがちである。しかしながら、保育に万能な技術があるわけではなく、それらは保育者と幼児との相互関係の上に成り立っており、幼児理解が最も重要であることは言うまでもない。

そこで、教育実習 I では、子どもと一緒に遊ぶことを中心とし、一緒に遊ぶなかで、子どもの発想の豊かさや、遊びの奥深さ、またそのおもしろさ、子どものかわいさなど、子どもの世界を実感することを通して、保育のおもしろさや魅力を学ぶことを重視している。そのため、指導案を作成しての部分実習などは課しておらず、希望する学生については、絵本の読み聞かせなどを各自お願いするようにしている。

実習日誌についても、かつての幼稚園実習では、「たくさん書くこと＝深い学び」という意識が少なからずあり、たくさん書くことを求められる風潮があった。また、学生が自分の中で学びを完結させ、それを日誌に書き、指導していただくという構図であることが多かった。しかしながら、最近では、実習生も先生方と共に子どもの遊びや生活を考える一員として捉えてくださる園が多くなっており、保育を語り合いながら、幼児理解や遊び理解を深めていくというスタンスでご指導くださる園が増えている。そのため、実習日誌についても、実習生が学んだことを記入し指導していただくという形ではなく、学生が記述した日誌をもとに、共に保育を考えながら、指導してくださることが多い。そのため、時系列形式の日誌よりも、ドキュメンテーション形式の日誌の方が活用しやすく、ドキュメンテーション形式の日誌を選択することが多くなってきているようである。昨今、保育における「同僚性」が重視されてきているが、実習生との関係もそのような枠組みで捉えてくださる園が多くなってきており、保育の本質的な部分の学びが促されているようである。

教育実習 I はこのような形で行われているので、ほとんどの学生が、先生方に丁寧に指導していただき、子どもたちとも心を通わすことができ、「楽しかった」という感想をもって終了する。また自分の不甲斐なさや、保育者としてのスキルのなさなどを感じ、新たな課題をもって終了する学生もいるが、それがマイナスイメージになることはほとんどなく、次回の実習に向けての具体的な課題となっている学生が多い。

(3) 教育実習Ⅱ

4年次の5月から6月にかけて2週間行われる教育実習Ⅱは、教育実習の集大成となる。基本的には教育実習Ⅰと同じ園で行われ、園によっては学年が上がった同じクラスに配属してくださる場合もあり、子どもたちや先生方との関係性もある程度できた上での実習となる。

教育実習Ⅱでは、基本的には、幼児が登園してから降園するまで1日を通して、担任保育者として保育する「責任実習」と呼ばれる実習を1回行っている。幼児が登園してから降園するまでの指導計画を立案し、その中でさまざまな遊びの援助や活動の提案などを考え、実践することになるので、学生にとっては緊張感の高い実習となる。

この責任実習も以前は、クラスの子どもたち全員が揃ったところで、活動を提案してみんなでそれに取り組む（例えば同じものを製作する、一緒にゲームをする等）ものが主流であったが、最近では子どもたちがそれぞれ好きな遊びをしているところで、1つのコーナーを設定し、そこで遊びや製作の提案をする場合や、一つのグループの遊びに入ってその遊びを継続的に援助し、そのうちの1日を責任実習とする場合など、園によってさまざまな形がある。チーム保育が行われている園では、保育者の一人として実習生を位置付けてくださり、責任実習もそのような立場で行われる場合もある。幼稚園における保育自体が、子どもの主体性や遊びをより重視する形に変化しており、それに伴って、責任実習のあり方も多様になってきているといえるだろう。

指導計画の立案についても、かつては、実習前に何パターンか作成し、園に持参するということが多かったが、最近では、実習開始後に、実際の幼児の遊びの様子や興味関心等を理解した上で、責任実習の指導計画を立案するということが多くなっている。また、日誌や指導計画は手書きが普通であったが、最近では、PC入力のフォーマットが用意されている園もあり、幼稚園のICT化に伴い、実習での書類作成も変化してくると言えるだろう。まだ、PC入力の園は少数ではあるが、今後増加してくるのではないかと推察される。手書きの良さもちろんあるが、丁寧な学生は、PCやスマホで下書きをし、実習日誌に鉛筆書きをし、それをペンで清書しており、どうしても実習中の睡眠不足等につながる。ICT化はそうした負担を減らす上では有効になるだろう。また、園の方でも、実習生の負担軽減は考えてくださっており、1時間程度実習日誌を書く時間を設けてくださっている園が多く、大まかな書く内容や、下書きまでは園で書き終えて帰宅する学生も多いようである。

教育実習Ⅱでは、保育者の立場としての実習を行い、保育者目線で幼児と関わるが多くなる。ほとんどの学生は、保育者という職業の魅力や奥深さ、楽しさを実感して実習を終え、事後指導では具体的な子どもの様子や、責任実習での反省が語られる。園からの評価も概ね良く、「玉川の学生は、保育について深い思考をもっている」と評価していただくことが多い。

3. 保育実習について

(1) 保育実習指導

保育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの事前指導は春学期に行っている。2023年度は保育実習指導Ⅰ3年生76名、保育実習指導Ⅱ4年生78名、保育実習指導Ⅲ2名が受講している。学部教員3名と、教師教育リサーチセンター教職サポートルームの客員教員2名、非常勤教員1名と行い、園長・保育士経験などにより現場での内容を踏まえながら授業を展開している。

保育実習事前指導Ⅰの授業内容は、保育実習の目的や方法の理解、保育所実習の実際の学び、学生による保育教材の作成と実践・振り返り、日誌の書き方や指導計画の作成の学び、という流れで行っている。保育所実習の実際では、現場の子どもや保育のDVDに加えて、現場での話を実際に教員から聞くことによって実習に対して前向きな姿勢で取り組めるようにしている。また、保育教材の作成と実践では、まず教員が絵

本、紙芝居、手遊び、ペープサート、パペット、パネルシアターの実演を行い、保育教材の魅力や演技方、作成の仕方について伝えてから取り組むため、自分が実習で演じてみたいものを考えながら取り組むことにより意欲的に作成する学生も増えている。また実践した際には、友人や教員からのコメントや助言をもらうことで、自分の良い所や課題を見つけるだけではなく、他者の実践から多くの学びや刺激をもらっている。

日誌の書き方では、同時期に教育実習の事前指導も行われているため、重複する内容もあるがテキストは同様のものを使用しているため指導内容にずれはなく、前述の「時系列」形式、「エピソード記述」形式、「ドキュメンテーション」形式の説明を行っている。保育所実習では教育実習に比べ保育時間が8時間以上になるため、日誌の分量が多くなりやすいところを、ページ数を足すのではなく文章の分量をどのように配分するのか、ということにも留意して書くことも伝えている。

指導案の書き方では、ねらいと内容の違いに混乱する学生が多くいるため、違いを説明した上で、実際に全員でねらいの文章を考えてみることを行っている。環境図の書き方、ポイントの絞り方、何に配慮するのか、年齢の発達をどのように考えて活動を考えるのか、ということについても実際の子どもの写真や教員の現場経験から伝えている。

保育実習指導Ⅱ・Ⅲの事前指導では、春学期に終えた施設実習の振り返りの発表から行う。多種多様な施設での経験を他学生から聞くことにより、自分の経験を振り返るだけでなく多様な施設での子どもや利用者の様子や他学生の学びを知る経験となっている。不安の強かった施設実習を生き生きと発表する学生が多く、自分の自信につながっている。

保育実習指導Ⅱ・Ⅲは合同で保育実習Ⅰの施設実習の振り返り、保育実習Ⅱ・Ⅲの目的・内容・方法を学び、それぞれに分かれて発表に向けての準備に取り掛かる。

保育実習指導Ⅱは、全15回の授業のうち教育実習を2週間挟みながら、グループで指導案を作成し12～14回目に模擬保育の発表を行う。まずは、保育実習事前指導Ⅰで学んだ基本的な指導案の書き方から、遊び発展型の指導案の書き方、コーナー保育の指導案の書き方を学び、自由に形式を選択し各自1枚の指導案を作成する。各グループに分かれ、持ち寄った指導案を発表しグループで模擬保育の発表をする指導案を選び、模擬発表に向けて一枚の指導案を作成するためにグループ作業を行っていくという流れである。それぞれのグループに担当教員が付き、指導案の作成や模擬発表に向けての準備の相談に当たる。

模擬保育の発表は広い大体育館の多目的室を利用するために、実際に司会、実習生役、子ども役を演じ保育における子どもの姿を予想しながら動いていく。そのため、準備に相当な時間をかけながら子どもの姿を想像し、どのようなものを準備するとよいか熟考する機会となっている。指導案を見ながら発表を見ている学生たちには、自分たちもやってみたいと思えるような活動を知ることができる機会となり、他学生の指導案から様々な書き方を学んでいる。教員や他学生からその場ですぐに助言をもらい、自分の実践への振り返りができることにより保育実習指導Ⅰからの学びの集大成につながっていく。保育実習指導Ⅲは少人数で課題を設定し、発表の準備作業、発表という流れとなる。最後の模擬保育の発表の回は保育実習指導Ⅱと合流し一緒に学ぶことによって学びを深めている。

秋学期の保育実習指導Ⅰは3年次の施設実習に向けて、オリエンテーションや児童福祉施設の実際について学んでいく。2022年度は乳児院、児童相談所、児童発達支援センター、児童養護施設、障害者支援施設の現場の施設長や保育者が講演してくださり、現場から学生に向けてのメッセージをいただくことで、よりイメージしやすい学びにつながっている。

保育実習指導Ⅱ・Ⅲは現場に向けての意識をさらに強く持てるよう、オリエンテーションを行う。自身の課題の振り返りを行いながら、保育士になるにあたり最終レポートの作成と発表を行う。全員の前での発表は自分の現場への思いや決意を語る機会となっている。

(2) 保育実習Ⅰ

保育実習Ⅰは保育所と児童福祉施設の2回の実習をさしており、それぞれ保育所実習は12日間、児童福祉施設は11日間で行われている。こちらは資格取得の必修科目であり、全員が両方の実習に行くことになっている。

保育所での実習は3年次夏休みに行われることから、最初の実習となり、不安を抱く学生も多いが、夏の比較的ゆったりとした保育が行われている時期でもあり、楽しく実習を終える学生がほとんどである。保育所での保育実習Ⅰについては、2023年度は保育士資格取得希望者76名が受講し、60園の保育所に実習をお願いしている。

保育所は保育時間が長く、保育士はシフトで勤務している。また、保育士だけではなく、看護師や栄養士、調理師など、多様な専門性をもった職員がおり、幼稚園以上にチームとして保育している状況であり、学生の学びもより広い視点でのものになっている。また、地域子育て支援センターとしての役割を併せもつ園や、児童発達支援センターを併設している園などもあり、多様な子育て支援や発達の支援を学ぶ機会ともなっている。

幼稚園との大きな違いとして乳児を含む低年齢の乳幼児が通ってきており、年齢や月齢による発達の違い、発達の個人差などがより明確であり、発達の過程などを理解することにもつながっている。また、保育所での実習を通して、学生の学びも一人ひとりに応じた保育を思考するきっかけになっているようである。

保育所での保育実習Ⅰも幼稚園実習Ⅰと同様、乳幼児と関わることを通して、生活や遊びを実感しての学びを重視している。また、大まかな保育所の機能や保育士の役割を理解し、保育士として必要な知識や技能について学ぶことが重視されている。

児童福祉施設での実習については、居住型の施設である、児童養護施設（23）、母子生活支援施設（22）、乳児院（11）、児童発達支援センター（4）、障害児（者）入所施設（9）、児童相談所一時保護所（5）に実習を依頼している。施設での実習は、施設の種類によって実習内容が大きく異なるため、多くの学生が、不安を抱いてスタートするようである。特に、児童養護施設や児童相談所一時保護所などでは、高年齢の児童もいるため、学生とあまり歳の変わらない児童とどのように接したら良いかに不安をもったり、母子生活支援施設では母親との関係に緊張したりする学生が多く見られる。また昨今の児童養護施設などは、グループホームなど少人数で生活している場合が多く、調理等の生活全般の支援を実習生も行うことになる。たくさんの量の調理などは経験したことがない学生が多く、生活力の面でも不安をもつ学生も多い。

しかしながら、ほとんどの学生が実習を終えた時には「楽しかった」「学びが多かった」と肯定的に捉えており、その変容は他の実習ではなかなか見られないほどである。高年齢児とも「自然に関わっていたら思った以上に良い関係がもてた」「食事作りを通して仲良くなれた」「音楽やスポーツなどの共通の趣味を通して話ができた」など、心配に思っていたことがむしろ経験としてはプラスに働いている場合も多い。一方で、児童との距離感に戸惑う学生も一定数おり、悩みながら実習を進めているが、施設職員の方が丁寧にご指導くださって、自分自身を振り返りながら実習を終えられるようである。施設への就職を希望する学生は多くはないが、保育者として、児童福祉の幅広い現場での学びは非常に重要である。

施設実習は実習時間の不規則さが学生の負担になっていることは否めない。指導担当の職員と同じシフトで勤務する場合や、すべてのシフトを経験させてくださるご配慮などから、1日程度の宿直や、早番、遅番などの時差勤務もほとんどすべての学生が体験している。日中は学校に行っている児童が多い児童養護施設などは、午後から夜間にかけてのシフトになることが多く、実習終了時間が夜間になるなど個別の対応が必要になる場合もある。

(3) 保育実習Ⅱ、保育実習Ⅲ

保育実習Ⅱ、保育実習Ⅲは、学生がいずれかを選択する。保育実習Ⅱは保育所、保育実習Ⅲは児童福祉施設

設での実習となる。2023年度は保育実習Ⅱを78名、保育実習Ⅲを2名の学生が履修している。2回目の実習となるので、1回目の実習を踏まえて、また将来の進路選択を見通しての選択となる。

保育実習Ⅱ（保育所）では、様々な保育を経験するため、同じ園で再び実習を希望している学生以外はほとんどが1回目とは別の園での実習となる。2回目の実習となるので、1回目よりも保育者の目線での実習となり、部分実習や責任実習などをさせていただくことが多いようである。幼稚園よりも低年齢の乳幼児が対象となるため、責任実習の内容も、クラス全員での活動だけではなく、個別の支援等が入ってくることも多い。また、異年齢のクラス編成などもあるため、幅広い年齢の幼児にあった遊びの提案や援助の方法なども考える必要がある。保育所は基本的に複数人で1クラスを担当するため、先生方と連携しての実習も重要になり、幼稚園実習とはまた違った学びとなる。

保育実習Ⅲは通所利用の施設での実習も可能であり、2023年度は児童養護施設（1）、乳児院（1）に依頼している。

4. 実習園との協働

幼稚園と保育所の実習では、毎年2月ごろに、合同での実習協議会を行なっている。ここ数年は、幼稚園、保育所それぞれの実習園の先生、及び実習生に登壇してもらい、新しい実習での学びについての事例報告や、それを通しての議論が展開できるように企画している。また、二部制にし、前半は実習園のみならず、広く幼稚園、保育所、養成校等の方々にアナウンスし、保育者養成や実習について広く議論の場となるように設定している。後半は当該年度の実習園のみにお集まりいただき、それぞれ学生の状況や、前半での議論を受けての具体的な実習内容の検討、実習園の先生同士での意見交換などを行なっている。

かつては実習園からのご意見を聞くことや、大学側からのお願いをお伝えする場となっていた実習協議会を、広く保育者養成や実習について考える場に変更したことで、多くの方が参加してくださるようになり、意見交換も活発に行われるようになった。また、実習園と大学とが協働して学生を育てていくというスタンスが自明のものとなり、実習園も新しい学びの形を模索してくださったり、大学からの提案を試してみたださったりと、実習を通してこれからの保育を考える場となっているように思われる。教職担当としても、実習園の先生方と保育や実習について語り合えることは非常に貴重な時間であり、それらを学生の指導や保育者養成に生かしていくことができる。

今後も、実習園と大学とが共に学生の育ちや学びを考えながら、これからの保育や保育者養成について協働的に学び合える場となるよう考えていきたい。

5. 実習における学生の学び

ここでは具体的な学生の学びについて明らかにするため、教育実習Ⅱにおけるある学生の日誌を見てみたい。2（2）で述べたように、実習生と指導教諭が共に保育を考えていくという過程において実習生と指導教諭の相互性が生じていることを示したい。本事例は令和4年度の実習生の実習日誌の抜粋である。なお、本稿では幼稚園実習での例を挙げるが、学生に求める基本的な学びのあり方としては、保育実習も共通しており、教育実習、保育実習共通の認識で指導している。

この学生は最初にその日の自分自身の目標を記入し、それについての自分自身の振り返りを記入している。

（1）教育実習Ⅱ 1日目

初日の日誌の1行目には「本日は、子どもの意見を尊重するために、どのように保育者と関わるべきなのかを考えながら行動しました」とある。同一園での2回目の実習ということもあり、初日の日誌も具体的な

子どもの姿を捉え、自分自身の関わりも振り返って記入しようとする姿が見られる。

具体的な事例の記述としては、製作を進めるために、子どもたちが意見を出し合いながら自分達で決めていくというプロセスを記入しており、「あまり手助けをしなくても、話し合いを進めることができことを学びました」と書かれている。これに対して指導教諭は「保育者がどこまで子どもたちに任せ、手助けしたら良いか等を意識できたことはとても大切な気づきだと思います」(①受容)と書かれている。そして、「保育者は日々どうだったかを振り返りそれによって子どもの成長や子どもたちの達成感にどう繋がっているのかを意識しています」(②共有)「実習中様々な子どもと関わって経験しながら学んでいってください」(③アドバイス)とある。

(2) 教育実習Ⅱ 2日目

翌日の日誌には、子どもたちの話し合いに対して、会話だけでうまくいかないと思ったので視覚的に分かるように見本を作って見せたところ話し合いを進めることがきたと書いている。前日の指導教諭のコメントにあったように、具体的な子どもへの関わりを振り返って記入できているといえるだろう。

またそれに対して指導教諭は「子どもの思いや答えを引き出しながら話し合いができた」ことを認め(①受容)、話し合いで決めたことが実際にはうまくいかないことがあっても試行錯誤することが大切なので、「子どもの姿を丁寧に捉えながら進めていけると良いですね」(③アドバイス)と書かれてあり、子どもが活動を進めていくときの姿を示唆している。

(3) 教育実習Ⅱ 3日目

さらに三日目の日誌には、子どもたちが遊園地ごっこのための話し合いで「トンネルを繋げる」ということを決めたが「なかなかつなげることができず」「斜めにテープを繋げればいいんじゃない』『でも高さが合わないからうまくつかない』と試行錯誤する姿が見られました」と書いてある。これは2日目の日誌で指導教諭の先生が「試行錯誤することが大切」であることを示しており、指導教諭のアドバイスを受け止め、その視点を持って実習に臨んだことが伺える。

これに対して指導教諭は「遊びの中で意欲的に関わり進めている姿はとてもいきいきしたり集中したりしていますね。子ども自身で考えたり、うまくいかなかったら工夫してやり直したりしながら、自ら学びを深めている子どもたちです」(④共感)と実習生の経験を共感的に理解している。また、「保育者としてどのように関わるか、環境を整えるか等、私自身も毎日考えながら進めています」(②共有)と書いており、実習生の学びに寄り添う姿が見られる。

(4) 分析

以上のように、この日誌からは、学生と指導教諭との実習日誌でのやり取りの中で、指導教諭の①実習生の学びや援助の受容②自分自身の保育観や幼児理解等の共有③アドバイス④学生の幼児理解への共感の4つの視点を見ることができた。このように、一方的な指導ではなく、指導教諭が学生の学びを共感的に理解し、それに対して自分の考えを伝えたり、アドバイスしたりする中で、学生との相互作用が生まれ学びが深まっていく様子が見受けられる。

また、指導教諭の助言を受けて、学生の日誌の記述も変化しており、保育を捉えるまた実習を振り返る視点が明確になっていることが分かる。この日誌からは、学生と指導教諭との相互作用が読み取れ、実習生の学びの深まりに指導教諭の助言の仕方が影響していることが分かる。

6. おわりに

以上のように教育実習、保育実習では、実習園と大学、学生と指導教諭の相互性の中で実習が進められている。もちろんすべての実習園とは言えない部分もあるが、多くの園や園の先生方と良い関係の中で実習が進められていると考えている。また、関係性が十分ではない園についても、実習協議会等を通して、他の園との実習指導の方法や、実習生との関係の作り方などを発信し、より充実した実習になるよう働きかけている。今後もこのような関係を続けていきたいと考える。

また、昨今の保育現場をめぐる様々な変化や課題についても、実習園と大学とが良好な関係を保ちながら共に学びあい、課題を解決できる関係を築いていきたい。